第四章

「ああ、君達が噂の『姜一座』かい」

募兵を始めてからおよそ一月。
ある街で出会った若い男は、姜ら賊軍の残兵達に対してそのように語り掛けてきた。

「もう噂になってるんですかい」
「そりゃあもう、寧陽の街で君達を知らない人はいないと思うよ。かわいい幼子の裸踊りで信者を集めている面白い一座だってね。確かに、噂通りかわいらしい子だ」
「え、えへへ、ありがとうございます」

嬉しそうに微笑む姜。
しかし傍らに侍る二人の賊は、対照的に苦々しい表情を浮かべていた。

「で、うちの街でも舞ってくれるのかい?」
「……ええ、夜半に演舞を行う予定ですよ」
「そりゃあいい。俺を含め、うちもなかなか娯楽がなくてね、退屈してたとこなんだよ。是非とも素晴らしい名演をお願いするよ」
「勿論、期待していてくんな!」

男が立ち去る姿を見送りつつ、賊の男達は声を潜め話し始めた。

「もうこんな辺境の街まで名が届いているようだな」
「宣伝効果はばっちりだったみてぇだな」
「……だが、懸念事項でもある。姜ちゃんの献身が単なる娯楽だと思われてしまったら、募兵の面には多少なり支障が出るだろう」
「確かに、最近参軍してくれる人も減ってるしなぁ」
「最初こそ衝撃的な募兵だったかもしれんが、こうなるといよいよ別の手段も考えないと……」

話し合う二人の後ろ姿を見つめながら、しかし姜も同じ心持ちでいた。
簪も差さぬ幼い少女がその身を挺して舞を披露する。
その見た目の衝撃たるや、娯楽の少ない貧民街において非常に大きな物だっただろう。
義を持たぬ平民達にとり、それは『誰が為に武器を取るのか』という問い掛けをするに充分な要素だった。

しかし連日何処かの街で演舞し続けていれば、いずれは民達も『飽き』を露わにし始める。
同じ本を何度も読むように。
やがては誰も目を向けなくなり、そして彼女達の下から離れていってしまうだろう。
それは、今従ってくれている者達も同様――。

「……！」

その時、ふと姜はある『計画』を思い付いた。
だがそれと同時に、その『計画』に対してある種の不安も抱く。

「姜ちゃん？　どうしたんだい？」
「……今晩、あたし、ちょっと頑張ってみる」
「え？」

「不安だけど……見てくれた人にちゃんと覚えてもらえるように、しないと……」

覚悟を決めた姜。
しかし背後で握った拳は、小さく震えていた。

「なんだなんだ？」
「噂の姜一座だってよ」
「お、遂にうちの街にも来たんかい」
「それがな、どうやら予め『協力』を表明しないと演舞場に入れてくれないらしいぜ」
「なんだそりゃ」

小さなあばら家の外で、男達が犇いている。
彼らの言には、『姜一座』がどうやら今までとは違う事をするらしいという内容の噂が流れていた。

「受付の人によるとな、なんか『ふれあいの宴』ってのを開いているらしいぜ」
「それってアレだろ？ 姜一座が演舞の後に毎回やるっていう、姜ちゃんにお酌してもらえたり、軽く会話できたりするっていうあの……」
「いや、今回はそうじゃないらしい。この街限定で、今回は一人ずつ『接待』してもらえるらしいぜ」
「ほんとかよ」
「どうする？ 入ってみるか？」

群衆に広がる波紋。
騒然と、人々は閉ざされた扉の奥へ想いを巡らせる。
その内に、一人の男が前へ出た。

「俺、行ってみるよ」

「お、おう、報告頼むぜ」
「ああ、任せときな」

その男は、見たところ二十代半ばか。
農夫なのだろう、がっしりとした体格の青年だ。
男はそのまま『受付』の男が差し出した帳簿に自らの名を書き示し、そして扉を開けた。

「……」

室内は薄暗い。
扉の奥には更に幕が垂らされ、中までは見えないようになっている。
揺らめく蝋燭の灯。
その光に照らされて。
幕の奥に、全裸姿の少女が座していた。

「……キミが、姜ちゃん？」
「はい、よろしくお願いします」

暗がりの中でも輝く白い肌。
微かに漂い立つ、幼子の甘い色香。
その蠱惑的な光景に、男は思わず生唾を呑んだ。

「それでは、早速始めますね」
「え、あ、あぁ……」

未だ当惑拭えぬ青年。
しかし姜はまるで尻込みする事なく、男の褲に手を掛け始めた。
そして彼が驚くよりも早く。
自らの鼻先に、隆々と猛り勃つ彼の陰茎を零す。

「ちょっと、姜ちゃん……？」
「では、失礼します」

一礼の後。
姜は、その小さな口で肉棒を舐め始めた。

「なっ……」

沐も済ませていない、仕事帰りの男の陰茎。
その臭気、その熱気たるや、少女の鼻腔には過剰なまでの劇薬のように思える。
しかし姜は妥協しない。
自ら両の手を背後で組み、顔だけを男の腰に押し付けて、小さな舌で目標を舐め上げてゆく。

「お、おぉ……」

その動きは、決して上手くはない。
むしろただ拙く、肉棒に唾液を塗りたくっているに過ぎない。

しかしそれでも。
いや、だからこそ。
必死に口淫を続ける少女の姿に、男は盛る心を抑えきれなかった。

「いいよ、姜ちゃん……」
「えへ……」

笑みながら竿を食み、亀頭を吸い。
陰毛と恥垢に口元を汚しつつも、更なる口撃で男を攻め上げる。
乳歯も未だ残る姜の口は、忽ち淫臭に支配された。
だがその味を強引に喉奥へ流し込み、己の顔面程もある肉棒を、姜はただ延々と舐め続ける。

「あぁ……」

やがて。
男の陰茎が、一度大きく跳ねる。
そして、直後。

ドピュッ！
「わっ……！」

突如として、少女の額に大量の白濁を放出した。
瞼を汚し、鼻梁を汚し。

口元まで伝い落ちてきたその雫を、姜はただ静かに受け止める。

「んっ……ごめんね、姜ちゃん」
「いえ、大丈夫です……ありがとう、ございました」
「ああ、こちらこそ……」

精液に顔を濡らしながらも微笑み、頭を垂れる姜。
その姿に、男の心から疑念の意は消え去っていた。

「姜ちゃん、俺はキミに協力するよ。だから、よかったらまた今度、やってくれるかい？」
「はい、もちろんです……！」

その答えを聞き、男は満足げに頷くと、踵を返して足早に立ち去って行った。
姜は、軽く口元を拭いつつ、声を上げる。

「次の方、どうぞー」

「……こりゃあひでぇな」

一夜明け、朝陽が差し込む小屋の中。
帳簿を手に室内へ入って来た二人は、その光景に思わず眉を顰めた。

「うぇ、なんちゅー匂いだ」
「おい、姜ちゃん、大丈夫か？」

しかし返事はない。
それもそのはず。
男達の子種をこれでもかと浴びまくり、姜の体はもはやボロ雑巾の如くに汚し尽くされてしまっている。
虚ろな双眸。
緩んだ口元。
顔は勿論、髪も、胸も、腹も、全身至る所に精液の痕をこびりつかせた状態で、姜は仰向けに倒れ込んでいた。

「まぁ、そりゃこうなるさ……ざっと三十二名、その全員からぶっかけられたんだからな」
「とりあえず呼吸はしてるっぽいぜ」

幼子の身にとり、三十二名との口淫はどれほどの重荷となっただろう。
自ら提案した『接待』とはいえ、月も見えぬ少女の体はすっかり憔悴してしまっている。

「起きられるかい、姜ちゃん？」
「んぅ……」

こぷ、と口の端から白い残滓を零しつつ、姜はゆっくりと身を起こした。
男から受け取った布端で顔を拭い、震える体に少しずつ力を入れてゆく。
体力の回復を待つ時間はない。
募兵を終えた今は、とにかく官軍が勘付く前にここから立ち去るのが先だ。
道中であれば、小川や池での沐浴なり、背負われながらの睡眠なり、いくらでもできる。

「おい、抱えてやれ」
「お、おう」

男の一人が、姜の体を抱き上げる。
あまりにも軽いその体は、一瞬驚いたかの如く震えこそしたが、すぐに脱力し男に身を預けた。

「よし、出立するぞ、遅れるなよ」
「あいよ！」
「うん……」

そう言いながら、一行は外へと出て――。
そして。

「！」

そこで、数十名の人垣を目撃した。
それは官軍ではなく、今まで街を回って集めてきた仲間達の姿。
皆何か言いたげな顔で、抱かれた姜を見遣っている。

「どうした、お前ら？」
「あ、あのよぉ……今回、姜ちゃんがこの街の男の股間を舐めたってのは、本当かい？」

その瞬間、賊の男は気付いてしまった。
そう、彼らにはただ裸踊りを見せただけ。
しかしそれでも、彼らはその後も姜の裸体を間近で観察できるとあって追従してきてくれていたのである。
だが今回、特別な接待で募兵を行った。
しかも性行為と何ら変わりない、下劣極まる方法で。

側近たる二人は勿論、朦朧とする姜自身も――。
餓狼の如き視線を向けた彼らが、一体何を言いたがっているのか。
すぐに理解できた。

「俺達にも、同じ事をしてくれても――」
「い、今はダメだ！ 姜ちゃんも疲れているし、この後官軍が来るかもしれないんだぞ！」

「でもよ、それじゃ不公平じゃねぇか」
「この後ならやってくれるのか？」
「いつやるの？ 今でしょ」

まずい事態だ。
予測できていたとはいえ、やはり。
欲望に動かされて集まった彼らが、その欲望を満たせぬとなれば。
離反は必至、最悪官軍に通報されてしまうだろう。

「……」

力で抑えつけるか。
二人が同時にそんな事を考えた。
次の瞬間。

「いい、よ……」
「!?」

男の腕に抱えられ、今にも気を失ってしまいそうな程に消耗した姜が、か細い声で呟いた。

「あたし、がんばる、から……みんなで、もっと……」
「姜ちゃん、何を言って――」
「もどって」
「え？」

「小屋の中、もどって、じゅんび……」
「姜ちゃん……」

姜の目は、まだ死んではいない。
光は、宿り続けている。

そして姜は、男に抱えられたまま――。
静かに、室内へと戻って行った。

斯くして、より結束を強めた義勇軍。
その数、この街での募兵分を含めおよそ八十。
未だ軍と呼ぶには寡少な規模だが、しかし順調に戦力となり始めている。
翌日街を発った彼女達は、更なる仲間を集めるべく次の街へと向かうのであった。

時に建安四年、四月の末。

この頃、大局は動きを見せ始めたが――。
それが表沙汰となるのは翌月。

劉玄徳挙兵の時まで待たれる事となる。